



TITLE:

# 國庫預金制度と兌換券發行高との 關係

AUTHOR(S):

汐見, 三郎

---

CITATION:

汐見, 三郎. 國庫預金制度と兌換券發行高との關係. 經濟論叢 1927, 24(1): 190-201

ISSUE DATE:

1927-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128491>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號一第

卷四十二第

行發日一月一年六十正大

租税の目的と實體

教授 法學博士

神戸 正雄

再マルクスの社會的意識形態について

教授 法學博士

河上 肇

土地の非資本的性質に就て

教授 法學博士

河田 嗣郎

徳川時代の農民逃散

教授 經濟學士

黒正 巖

經濟學の根柢をなす公益的精神に就て

助教授 法學士

石川 興二

露西亞の産業組合運動

助教授 經濟學士

八木芳之助

フイジオの勞賃論と「純收入」

講師 經濟學士

森耕二郎

日支通商航海條約改正について

教授 法學博士

末廣 重雄

國庫預金と兌換券發行高との關係

助教授 法學士

沙見 三郎

武士階級の窮乏

教授 經濟學博士

本庄榮治郎

家族統計概論

教授 法學博士

財部 靜治

海運勞務の提供に要する原費

教授 經濟學博士

小島昌太郎

琉球と慶長役

教授 法學博士

山本美越乃

## 國庫預金制度と兌換券發行高との關係

沙 見 三 郎

## 第一 委託金庫制度と預金制度

國家の財政は、その國の國民經濟と密接なる關係に立つてゐる。現に我國の財政について見ても、一般會計のみにて拾六億圓、特別會計を加ふれば參拾四億圓の巨額が毎年國庫に納められ且つ國庫から支出せられてゐるのであるから、我が國民經濟が我が財政の影響を受ける事の大なるは云ふ迄も無い。従つてこの巨額の國庫金を出納保管するに際し如何なる方法を探るか即ち國庫制度の内容如何は、國民經濟の上より見ても重大なる問題である。

國庫制度は、國庫金の出納保管の方法を標準として、金庫制度と預金制度との二つに大別する事が出来る。國家が金庫なる特殊の機關を置きて國庫金の出納保管をなすのが金庫制度であつて、國家自ら其事務に當るか又は中央銀行に委託するかによつて金庫制度は更に國有金庫制度と委託金庫制度とに區別せられるのである。預金制度の下に於ては、金庫なる特殊機關が存在せず、國庫金の出納保管は凡て中央銀行に於ける一種の預金取引として行はれるのである。金庫制度と預金制度とは各々長短を有し、國により時代により其態様を異にしてゐる。我國にては明治

- 1) 大正十五年度豫算についての大藏省主計局の調査
- 2) Wagner; Ordnung der Finanzwissenschaft S. 768-769 (Handbuch der P. O. III. 1.) L. v. Stein; Lehrbuch der Finanzwissenschaft II. 1. S. 74-81. Heckel; Das Budget S. 237

二十三年三月迄國有金庫制度が行はれてゐたが、同年四月以後委託金庫制度に移り、更に大正十年に於ける會計法改正の結果として大正十一年四月より預金制度を採用したのである。

大正十年の會計法改正は、決算提出の時期の繰上、豫備金の改正其他種々の方面に及んでゐるが、その眼目とする所は國庫制度に於て委託金庫制度を棄て、預金制度を採用した事にある。國庫制度に此改正を行ふ事によつて、國家財政と國民經濟との疏通をはかり特に金融市場に好影響を齎すべく豫期せられてゐたのである。蓋し、舊會計法の下に於ては國庫金が日本銀行の他の營業資金と隔離して金庫内に死藏せられてゐたに拘らず、新會計法實施の結果として巨額の國庫金、日本銀行に預金せられ、日本銀行の營業資金をそれだけ増加したと信せられてゐるからである。然しこの豫期せられたる影響なるものは果して事實に於て現はれてゐるであらうか。金庫制度より預金制度に推移した事が經濟上如何なる意味を有してゐるかを、政府預金の變動及び日本銀行兌換銀行券發行高の變動の二つの方面より明かにするのが、本研究の目的とする所である。

## 第二 政府預金の變動

日本銀行は政府預金として第一表の如き月末數字を發表してゐる。大正十一年三月を境界として舊會計法時代と新會計法時代との二つが分れるのである。

3) 堀江博士：財政學第十二版 1062—1093頁

4) 大藏省理財局：金融事項參考書

第一表 政府預金月末現在高表

	舊會計法時代					新會計法時代				
	大正五年度	大正六年度	大正七年度	大正八年度	大正九年度	大正十年度	大正十一年度	大正十二年度	大正十三年度	大正十四年度
四月末	二七、七五九 <sup>千四</sup>	四二、三三七 <sup>千四</sup>	六六、〇八八 <sup>千四</sup>	一、〇七五、四九一 <sup>千四</sup>	一、〇四四、三五一 <sup>千四</sup>	一、一二五、〇九三 <sup>千四</sup>	八〇、一八〇 <sup>千四</sup>	八五、四三二 <sup>千四</sup>	一〇五、三三三 <sup>千四</sup>	六八、八八八 <sup>千四</sup>
五月末	二七、一〇三 <sup>千四</sup>	四一、八八六 <sup>千四</sup>	六六、二二五 <sup>千四</sup>	一、一二五、七五七 <sup>千四</sup>	一、〇四四、三五一 <sup>千四</sup>	一、一二五、〇九三 <sup>千四</sup>	八五、四三二 <sup>千四</sup>	八九、九三二 <sup>千四</sup>	一〇七、八七五 <sup>千四</sup>	六八、八八八 <sup>千四</sup>
六月末	二五、〇九〇 <sup>千四</sup>	四〇、〇五五 <sup>千四</sup>	七〇、二九五 <sup>千四</sup>	一、〇九七、七五五 <sup>千四</sup>	一、〇六六、五四二 <sup>千四</sup>	一、〇八、〇〇七 <sup>千四</sup>	六八、八八六 <sup>千四</sup>	八八、四四〇 <sup>千四</sup>	九四、二七〇 <sup>千四</sup>	六八、八八八 <sup>千四</sup>
七月末	二五、三六六 <sup>千四</sup>	四〇、八八四 <sup>千四</sup>	七五、二九五 <sup>千四</sup>	一、〇六六、四四四 <sup>千四</sup>	一、〇九〇、三三三 <sup>千四</sup>	一、〇五五、七二〇 <sup>千四</sup>	七〇、八五五 <sup>千四</sup>	八〇、〇四〇 <sup>千四</sup>	九四、二七〇 <sup>千四</sup>	六八、八八八 <sup>千四</sup>
八月末	二九、四八二 <sup>千四</sup>	四九、八三三 <sup>千四</sup>	八七、四四八 <sup>千四</sup>	一、二五五、一三三 <sup>千四</sup>	一、一八三、八九八 <sup>千四</sup>	一、一三〇、一七四 <sup>千四</sup>	七五、九一二 <sup>千四</sup>	九〇、九二四 <sup>千四</sup>	九八、六六〇 <sup>千四</sup>	六八、八八八 <sup>千四</sup>
九月末	二九、〇九四 <sup>千四</sup>	四九、〇五四 <sup>千四</sup>	九六、四四〇 <sup>千四</sup>	一、〇九〇、八七五 <sup>千四</sup>	一、〇四八、二〇九 <sup>千四</sup>	一、〇九七、五五五 <sup>千四</sup>	七五、九一二 <sup>千四</sup>	八六、〇六六 <sup>千四</sup>	九四、二七〇 <sup>千四</sup>	六八、八八八 <sup>千四</sup>
十月末	二九、六六六 <sup>千四</sup>	四九、四七五 <sup>千四</sup>	九六、六六〇 <sup>千四</sup>	一、二二九、〇四四 <sup>千四</sup>	一、〇六六、八二二 <sup>千四</sup>	一、〇九二、八二二 <sup>千四</sup>	七六、〇五五 <sup>千四</sup>	九〇、九二四 <sup>千四</sup>	九八、六六〇 <sup>千四</sup>	六八、八八八 <sup>千四</sup>
十一月末	三〇、〇四九 <sup>千四</sup>	四九、〇七五 <sup>千四</sup>	九七、四四四 <sup>千四</sup>	一、三三四、〇三六 <sup>千四</sup>	一、〇六六、一〇五 <sup>千四</sup>	一、〇五五、四四四 <sup>千四</sup>	七六、六六三 <sup>千四</sup>	九〇、九二四 <sup>千四</sup>	九八、六六〇 <sup>千四</sup>	六八、八八八 <sup>千四</sup>
十二月末	三〇、一八七 <sup>千四</sup>	四九、七七八 <sup>千四</sup>	九八、七六六 <sup>千四</sup>	一、三四〇、五五五 <sup>千四</sup>	九九九、二六五 <sup>千四</sup>	九二〇、四四五 <sup>千四</sup>	七六、〇五五 <sup>千四</sup>	八二、〇二四 <sup>千四</sup>	九八、六六〇 <sup>千四</sup>	六八、八八八 <sup>千四</sup>
一月末	三〇、八九五 <sup>千四</sup>	五〇、六六六 <sup>千四</sup>	一〇〇、〇五五 <sup>千四</sup>	一、四〇、八九三 <sup>千四</sup>	一、〇〇九、九五三 <sup>千四</sup>	九八、〇〇四 <sup>千四</sup>	七三、〇九五 <sup>千四</sup>	八〇、〇六七 <sup>千四</sup>	七九、六六〇 <sup>千四</sup>	六八、八八八 <sup>千四</sup>
二月末	三〇、四二六 <sup>千四</sup>	五〇、二二八 <sup>千四</sup>	一〇〇、七五五 <sup>千四</sup>	一、二五三、二七七 <sup>千四</sup>	一、〇四四、八九五 <sup>千四</sup>	九八、〇〇九 <sup>千四</sup>	七四、二六三 <sup>千四</sup>	九四、一九四 <sup>千四</sup>	八三、九四三 <sup>千四</sup>	六八、八八八 <sup>千四</sup>
三月末	四〇、一三〇 <sup>千四</sup>	五三、二四八 <sup>千四</sup>	一〇〇、六六六 <sup>千四</sup>	一、四四六、六三三 <sup>千四</sup>	一、二二六、六四二 <sup>千四</sup>	一、〇四四、三三三 <sup>千四</sup>	八七、八二五 <sup>千四</sup>	一〇七、四七五 <sup>千四</sup>	七四、二六三 <sup>千四</sup>	六八、八八八 <sup>千四</sup>

もし第一表に示されてゐる政府預金即ち國庫金の全部が大正十一年三月迄は全く金庫に死藏せられ、而して大正十一年四月以後にはその凡てが日本銀行の營業資金に充てられてゐるものとせば、確に大正十年の會計法改正は我が國民經濟に於て時代を劃する重大なる出來事であつたに違ひない。然し事實はかゝる單純なる比較を許さない、これには二つの制限が加へられてゐるのである。

第一の制限としては、明治二十七年法律第十六號「國庫金出納上一時貸借に關する件」が委託金庫制度の時代に行はれてゐた事をあげねばならぬ。同法は第一條に次の規定を設けてゐる。

政府は國庫金出納上一會計年度間餘裕あるときは相當の利子を徴して之を當座預又は定期預として日本銀行に預け入るゝことを得。

故に大正十一年三月迄の國庫金について云へば、第一表に政府預金として掲げたる國庫金の全部が金庫に死藏せられてゐた譯でなく、國庫金の一部は明治二十七年法律第十六號により當座預又は定期預として日本銀行に預け入れられ間接に金融市場と交渉を有してゐたのである。

第二の制限としてあぐべきは、預金制度の下に於ける政府預金なるものが當座預金の外に別口預金及び指定預金をも含み従つてその全部が金融市場と交渉を有してゐるのではない事である。預金制度の時の政府預金は、武藤氏の分類によれば第二表の如き内容を有してゐる。

第二表 政府預金の内譯表

當座預金勘定	
一般會計	預金部特別會計
	臨時國庫證券收入金特別會計
	國債整理基金特別會計
大正七年軍用手票、軍用切符、損傷小額紙幣、新鑄造貨幣、新發行小額紙幣、引揚貨幣、流通不便貨幣、舊韓國補助貨、朝鮮銀行券、臺灣銀行券、橫濱正金銀行券（但し流通地域外に於ける受人に係るもの）	

## 政府預金 別口預金勘定

金地金

銀地金

圓形銀塊、供託金たる特殊の通貨、外國貨幣、外國貨幣拂爲替券、法令の規定に依り納付を許されたる證券

以上に掲ぐるもの、外大藏大臣に於て隨時指定する所の通貨

## 指定預金勘定

内地指定預金

在外指定預金

英貨

米貨、佛貨、獨貨

第二表の示す如く、別口預金は現金又は預金に準すべき特定物の保管であり、指定預金は運用の方法を指定せられたる信託預金たるが故に、日本銀行の營業資金を考へる場合には同じく政府預金であつても此等兩者を控除せねばならぬ。要するに、大正十一年四月以後に於ては、日本銀行預金として金融市場に關係あるは、政府預金の全部でなくしてその一部分たる當座預金なりと云ふ事が出来る。

この二つの制限を併せ考へると、問題は可なり複雑となつてくる。委託金庫制度が預金制度に變つたからと云つて、從來死藏せられてゐた國庫金の凡てが金融市場を潤はすと直に斷定すべきでなく、問題を條件的に扱はねばならぬ。即ち委託金庫制度時代の「國庫金出納上一時貸借に關する件」に基く當座預及び定期預の金額を一方に掲げ、預金制度時代の當座預金勘定の金額を他方に掲げ、兩者を比較する事によつて始めて國庫金の死藏と活用の問題が解決せられるのである。然るに委託金庫制度の當時にても預金制度の今日に於ても、單に國庫金の總額のみが發

表せられ内容的の數字が明かにせられてゐないから、局外の私よりしては金庫制度と預金制度との比較を數量的に試みる事は全然不可能である。植野學士<sup>6)</sup>の研究によれば、日本銀行の營業週報は英蘭銀行のそれよりも詳細に出來てゐるのであるが、遺憾ながら此點は同じく明瞭を缺いてゐる。

かくて日本銀行の營業資金をなす政府預金の金額によつて、國庫制度改正の金融市場に及ぼす影響を直接に觀察する事が出來ないとせば、茲に間接の方法を講せねばならぬ。以下私が日本銀行兌換銀行券發行高の季節的變動を研究せんとするのは、實は之により國庫制度改正が金融市場に及ぼせし影響を知らんとするからである。

### 第三 兌換券發行高の變動

大正十一年四月を期として金庫制度より預金制度に移り、而して從來死藏せられし國庫金が金融市場に活用せられたとせば、大正十一年四月を中心として日本銀行兌換銀行券發行高の上にも或種の變化が起つてゐなければならぬ筈である。蓋し——當時預金制度を主張せし論者の言葉を借りて云へば——金庫制度の下に於ては國庫金は金庫に死藏せられ従つて國庫金の増減は兌換券發行高に何等の影響を及ぼさざりしに拘らず、預金制度にては當座預金の金額だけは日本銀行に預金として復歸し兌換券の收縮を促すものなるが故である。

國庫制度の改正せられし大正十一年四月を中心として、その前後數年の日本銀行兌換銀行券平

6) 植野學士；倫敦金融市場の點 27—64頁

7) 第四十四回帝國議會會計法改正法律案外一件委員會議錄



均發行高を調査して第三表を得たのである。

第三表 日本銀行兌換券毎月平均發行高表

月	舊 會 計 法 時 代					新 會 計 法 時 代				
	大正五年	大正六年	大正七年	大正八年	大正九年	大正十年	大正十一年	大正十二年	大正十三年	大正十四年
四月	千圓 三六、二七	千圓 四四、七三	千圓 六四、六六	千圓 八六、八三	千圓 九二、七九	千圓 一〇六、七七	千圓 一四八、八三	千圓 一五三、三三	千圓 一五三、三三	千圓 一五三、三三
五月	千圓 三八、四四	千圓 四八、八六	千圓 六八、六六	千圓 八八、八六	千圓 九八、八六	千圓 一〇八、八六	千圓 一四八、八三	千圓 一五三、三三	千圓 一五三、三三	千圓 一五三、三三
六月	千圓 三八、二〇〇〇	千圓 四八、六六	千圓 六八、六六	千圓 八八、八六	千圓 九八、八六	千圓 一〇八、八六	千圓 一四八、八三	千圓 一五三、三三	千圓 一五三、三三	千圓 一五三、三三
七月	千圓 三七、七七	千圓 四七、二六	千圓 六七、二六	千圓 八七、二六	千圓 九七、二六	千圓 一〇七、二六	千圓 一四七、二六	千圓 一五二、二六	千圓 一五二、二六	千圓 一五二、二六
八月	千圓 三二、七元	千圓 四二、五五	千圓 六二、五五	千圓 八二、五五	千圓 九二、五五	千圓 一〇二、五五	千圓 一四二、五五	千圓 一五二、五五	千圓 一五二、五五	千圓 一五二、五五
九月	千圓 四七、三〇	千圓 六八、〇二	千圓 八八、〇二	千圓 一〇八、〇二	千圓 一二八、〇二	千圓 一四八、〇二	千圓 一六八、〇二	千圓 一六八、〇二	千圓 一六八、〇二	千圓 一六八、〇二
十月	千圓 四九、五二	千圓 六九、一七	千圓 八九、一七	千圓 一〇九、一七	千圓 一二九、一七	千圓 一四九、一七	千圓 一六九、一七	千圓 一六九、一七	千圓 一六九、一七	千圓 一六九、一七
十一月	千圓 四九、四九	千圓 六九、三三	千圓 八九、三三	千圓 一〇九、三三	千圓 一二九、三三	千圓 一四九、三三	千圓 一六九、三三	千圓 一六九、三三	千圓 一六九、三三	千圓 一六九、三三
十二月	千圓 五九、二五	千圓 七九、二九	千圓 九九、二九	千圓 一二九、二九	千圓 一四九、二九	千圓 一六九、二九	千圓 一八九、二九	千圓 一八九、二九	千圓 一八九、二九	千圓 一八九、二九
一月	千圓 五〇、七八	千圓 七〇、四四	千圓 九〇、四四	千圓 一一〇、四四	千圓 一三〇、四四	千圓 一五〇、四四	千圓 一七〇、四四	千圓 一七〇、四四	千圓 一七〇、四四	千圓 一七〇、四四
二月	千圓 四七、二六	千圓 六七、三三	千圓 八七、三三	千圓 一〇七、三三	千圓 一二七、三三	千圓 一四七、三三	千圓 一六七、三三	千圓 一六七、三三	千圓 一六七、三三	千圓 一六七、三三
三月	千圓 四七、三三	千圓 六七、三三	千圓 八七、三三	千圓 一〇七、三三	千圓 一二七、三三	千圓 一四七、三三	千圓 一六七、三三	千圓 一六七、三三	千圓 一六七、三三	千圓 一六七、三三
四月	千圓 四七、三三	千圓 六七、三三	千圓 八七、三三	千圓 一〇七、三三	千圓 一二七、三三	千圓 一四七、三三	千圓 一六七、三三	千圓 一六七、三三	千圓 一六七、三三	千圓 一六七、三三

問題は大正十一年三月と四月との境界である。舊會計法即ち金庫制度の行はれし最後の月たる大正十一年三月と新會計法即ち預金制度の行はれし最初の月たる大正十一年四月とを比較する事によつて、其間に何等かの變化を期待し得べきである。兌換券平均發行高は、大正十一年三月に

は拾壹億四千貳百參拾萬圓ありしものが、大正十一年四月には六百五拾萬圓増の拾壹億四千八百八拾萬圓と云ふ數字を示してゐる。然れども三月と四月との間に此種の増加のある事は大正六年、大正九年、大正十年に先例のある事である。否な、大正七年、大正八年の如きは、三月から四月にかけて兌換券平均發行高が減少せし事實さへ示してゐるのである。この二つの現象を考へ合はすと、國庫制度改正は、少くとも大正十一年三月から同年四月に至る過渡期に於ては兌換券發行高の上に何等の影響をも及ぼさずと云ふ結論に達する。

次に考へ得べき事は、國庫制度の改正が新會計法實施の直後に効果を及ぼさない迄も、其以後に於て、或は徐々に又は急激に、兌換銀行券發行高に影響したのでないかの點である。第三表の數字を基礎として、大正七乃至大正十四會計年度、大正七乃至大正十會計年度及び大正十一乃至大正十四會計年度の三期にわたり、兌換券平均發行高の季節的變動を研究して第四表を作つたのである。第四表に實數として示したのは各月平均發行高の幾何平均であつて、第四表の指數と云ふのは、實數の年度平均發行高を一〇〇に立て、各月平均發行高の數字に換算を加へたものである。

第四表 日本銀行兌換券毎月平均發行高の季節的變動表

四 月	實 數			指 數		
	七—一四年度 (舊會計法時代)	七—一〇年度 (新會計法時代)	七—一四年度 (舊會計法時代)	七—一四年度 (舊會計法時代)	七—一〇年度 (新會計法時代)	七—一四年度 (新會計法時代)
	一、〇三〇、五二	九八〇、〇三	一、二六六、三三	九八・六	九六・七	壹二・五

年 平 均 月	實 數			指 數		
	七—一四年度 (舊會計法時代)	七—一〇年度 (舊會計法時代)	一一—一四年度 (新會計法時代)	七—一四年度 (舊會計法時代)	七—一〇年度 (舊會計法時代)	一一—一四年度 (新會計法時代)
五 月	1,007,336 <sub>千円</sub>	887,732 <sub>千円</sub>	1,267,719 <sub>千円</sub>	98,778	87,717	99,232
六 月	1,097,644	932,840	1,332,942	98,644	84,322	99,844
七 月	1,081,860	997,562	1,370,334	98,333	92,152	98,330
八 月	1,098,568	977,824	1,297,436	98,020	92,922	98,650
九 月	1,133,826	1,057,832	1,332,006	97,752	96,622	99,852
十 月	1,147,666	1,037,766	1,352,272	101,232	96,622	103,332
十一 月	1,177,522	1,067,222	1,372,222	100,222	101,222	99,622
十二 月	1,256,822	1,267,222	1,452,222	111,622	113,222	110,622
一 月	1,256,822	1,267,222	1,452,222	111,622	113,222	110,622
二 月	1,177,522	1,067,222	1,372,222	100,222	101,222	103,332
三 月	1,107,222	1,037,766	1,352,272	98,020	96,622	99,852
年 平 均	1,136,333	1,032,833	1,337,833	100,000	100,000	100,000
四 月	1,108,400	1,097,833	1,270,066	98,778	101,222	98,778

第四表を見ると、金庫制度の行はれし舊會計法時代も預金制度の行はるゝ所會計法時代も、兌換券發行高の季節的變動の上には大した差異を示してゐない事が分る。兌換券平均發行高の谷は四月、五月にして、峯は十二月、一月、而して兌換券平均發行高が會計年度の前半には低く會計年度の後半には高きが如き、預金制度及び金庫制度の兩者に共通せる特徴である。

以上の研究の結果によれば、日本銀行兌換銀行券平均發行高は、單に新會計法實施の當初に於て變化を受けざりしのみならず、新會計法採用後四五年を経過したる今日に於ても重大なる影響のある事を認むるを得ないのである。

#### 第四 國庫制度改正の經濟的意義

日本銀行兌換銀行券發行高の季節的變動を通じて見るに、一部論者の期待を裏切り、委託金庫制度も預金制度も其の經濟的意義に於て大して異なる所がない様である。勿論日本銀行兌換券の發行高を決定するものとしては政府預金以外に幾多の事情を顧慮せねばならぬが、季節的變動にこの結果が現はれてゐる以上は私の結論に大した修正を加ふる必要がない様である。果して然らば、委託金庫制度の行はれし際の明治二十七年法律第十六號に基く當座預及び定期預の數字と預金制度の際の當座預金勘定の數字とが大體一致し、従つてその點に於ては國庫制度の改正が大した影響を與へなかつた事を推測し得るのである。

委託金庫制度も預金制度も結局金融界に變つた影響を與へなかつた事はこれで明かであるが、地方金融は國庫制度改正の爲めに返つて壓迫を受けたと主張する議論がある。此議論は次の二つの理由に基くのである。

其の一つとして舊會計法時代に行はれてゐた帝國鐵道會計法第十四條の雜部預入金の規定が引

用せられてゐる。同條の「本會計所屬出納官吏」保管する現金にして金庫に委託されたるものに付ては相當の利子を徴して日本銀行又は其の代理店に預け入るゝことを得」なる規定に基き、舊會計法時代に相當の金額が各地方の銀行に預け入れられ地方の金融界を潤はしてゐたのであつた。然るに大正十年の會計法改正に關連して此規定が廢せられた爲めに、地方金融は此資源を失ひ可なりの壓迫を感じたと云ふのである。

其の二には、金庫制度の下には所謂「見せ金」が行はれて居たのが、預金制度の結果廢止せられた事である。本來金庫にある國庫金は銀行の他の營業資金とは全然分離して保管すべく決して混同を許すべきでない筈であるが、事實は之に反してゐたのである。而してその結果は金庫検査の際の「見せ金」として現はれて來たのである。かゝる非合法的のものを引用するのは或は議論に混雜を來たすかも知れないが、「見せ金」なる言葉が反證するが如く、金庫制度の下に於ては國庫金が地方金融の有力なる一分子であつた事は疑ふべからざる事實である。従つて預金制度の採用は此點に於ても地方金融には苦痛を與へた譯である。

委託金庫制度は國庫金を死藏するものなり、預金制度は國庫金を活用するものなりとは、學者及び實際家が概念的に構成したる理論である。勿論、舊會計法それ自體と新會計法それ自體とを單純に比較せば、舊會計法が死藏せし國庫金を新會計法が活用してゐるのは確な事實である、然

るに、前述の如く、舊會計法はそれ自體單獨に行はれてゐたのでなく、其外に「國庫金出納上一時貸借に關する件」及び「鐵道會計法第十四條」が合法的に採用せられ、且つ「見せ金」制度が非合法的に併せ行はれ、金庫制度の當時に於て已に中央及び地方の金融は國庫金の利用によつて相當の屈伸力を持つてゐたのである。従つて、かの金庫制度と預金制度との比較の概念論を新舊の兩會計法の比較に止めるならばそれは正しいのであるが、國庫金の利用が舊會計法時代と新會計法時代との兩時代に如何に變つて來たかと云ふ問題に適用する事となると考へ方を變更せざるを得ないのである。而して私が日本銀行兌換銀行券平均發行高の季節的變動について試みたる研究の結果によれば、國庫金、我が金融界との關係は委託金庫制度の當時も預金制度の今日も——少くとも今日迄は——大差なしと斷定し得るのである。